

美は細部に宿る

縄文時代を中心に古墳時代までの土器の細部を見ていこうとする企画展です

石岡市立ふるさと歴史館 第35回企画展

令和6年1月10日(水)～4月7日(日)

午前10時～午後4時30分、月曜休館、入場無料

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社1-2-10 石岡小学校敷地内 電話 0299-23-2398

美は細部に宿る

◆目次

はじめに	1
口縁部を考察しよう	2
胴部を考察しよう	6
底部を考察しよう	9
土器製作のまとめ	16
おわりに	17

◆例言

本冊子は、令和6（2024）年1月10日～4月7日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第35回企画展に際して作成したものです。

展示及び本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課（金子悠人）が行いました。

◆謝辞

展示にあたり、以下の方にご協力いただきました。御礼を申し上げます。

佐々木由香、奈良部大樹、西本志保子

はじめに

石岡市では、これまで時代を問わず、多くの発掘調査が行われてきました。また、昨年度も 84 件の試掘調査がおこなわれるなど、市内のどこかで発掘調査が継続的に実施されています。発掘調査では、多くの遺物が出土していますが、なかなか全てを皆さんにお見せすることはできていません。

そこで今回は、『美は細部に宿る』と題して、土器を中心に、細部に残る痕跡や、その技法に着目した展示を行うこととしました。土器の新しい見方を発見していただくとともに、当時の人々の生活を感じていただければ幸いです。

これまで、展示されてこなかった遺物も多く展示されていますので、じっくりとご覧ください。

なお、『美は細部に宿る』と銘打っておりますが、展示担当者はそれほど繊細ではなく、どちらかというと大雑把な性格と自負しております。パネルには細心の注意を払っておりますが、誤植等ありましてもご容赦ください。

I 口縁部を観察しよう

ここでは、口縁部を中心とした痕跡から土器製作に迫ります。口縁部で紹介するのは「文様割付」です。

口縁部から底部に至るまで、土器には様々な文様が施されています。丁寧に観察していくと、文様が計画的に設計されているか否かを推測し、土器の施文方法に迫ることができます。

文様割付は、これまで多くの研究が散見されますが、ここでは、石岡市で出土した縄文土器・弥生土器の文様割り付けを実施したので、その成果をみてみます。

II-Q1 「文様割付」とは？何が分かる？

「文様割付」は、土器にどのようなデザインをどう配置したかを確かめる手法です。

図1の黒い線をご覧ください。まず、各土器の口縁部径、胴部径などを設定します。図の円がそれに当たります。次に文様区画の結節点や把手などの中心点を円の上に記録し、円の中心と結び、角度を測ります。これにより、きちんと

区画して土器を作ったかなど、製作者の認知構造を考えられます。ちなみに、図1は、口縁部・胴部ともに、綺麗な等分にはなっていません。例えば、1-2間と1-3間では大きな開きがあることから、割付にこだわりのない、変則的な区画をする様子が推測できます。

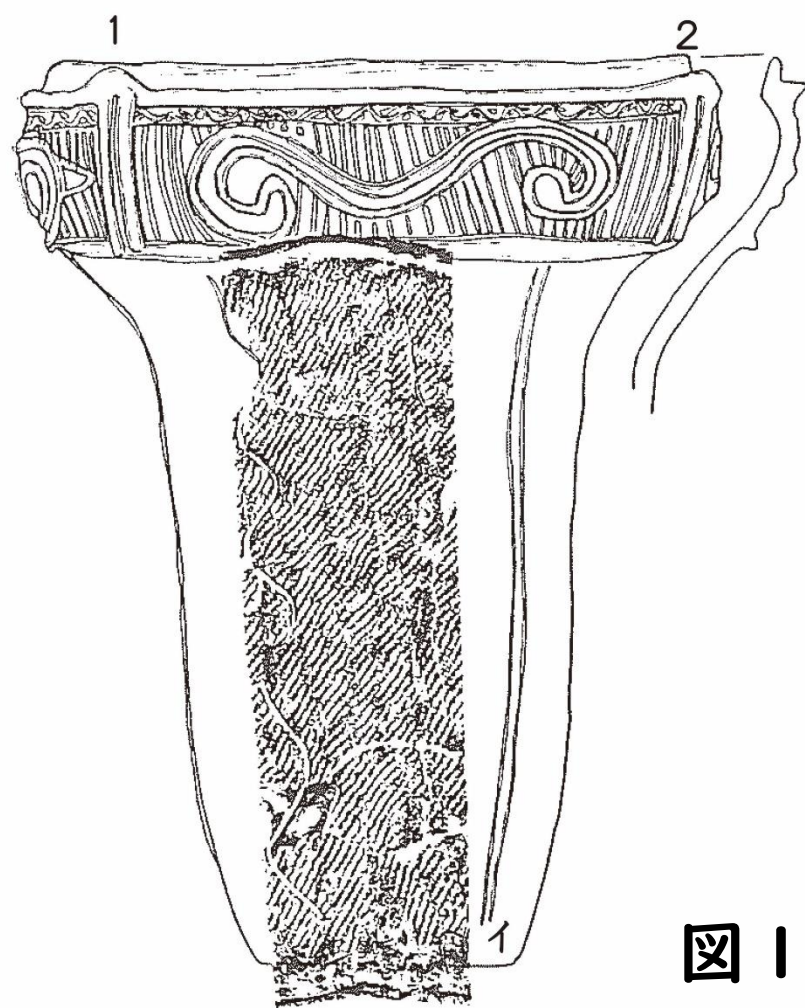
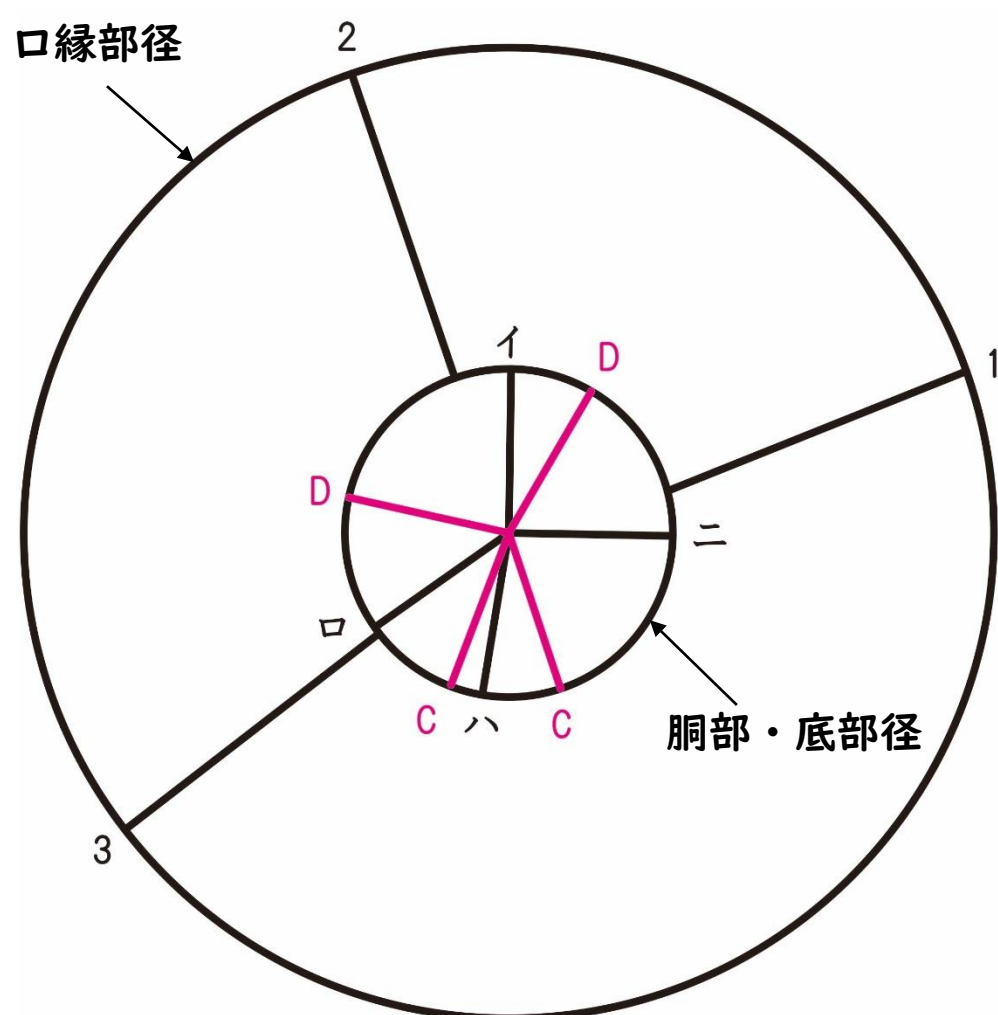


図1

一方で、図2の黒線をご覧くださいと、口縁部・胴部ともに、ほぼ均等に割付がされています。等間隔に文様を配置する意識を窺うことができます。縄文中期土器の文様割付は時期ごとに傾向があることが知られており、石岡市でもさらに数を増やして分析を続けていこうと思います。

時期ごとの分析では弥生土器も胴部に文様区画の結節点分かる土器が存在します。こちらも同様の方法で割付を

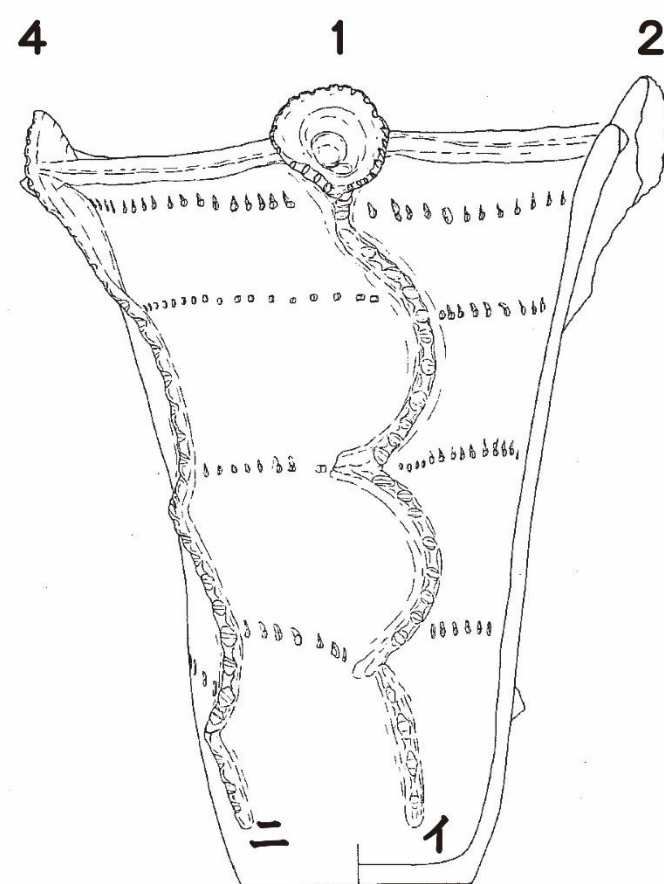
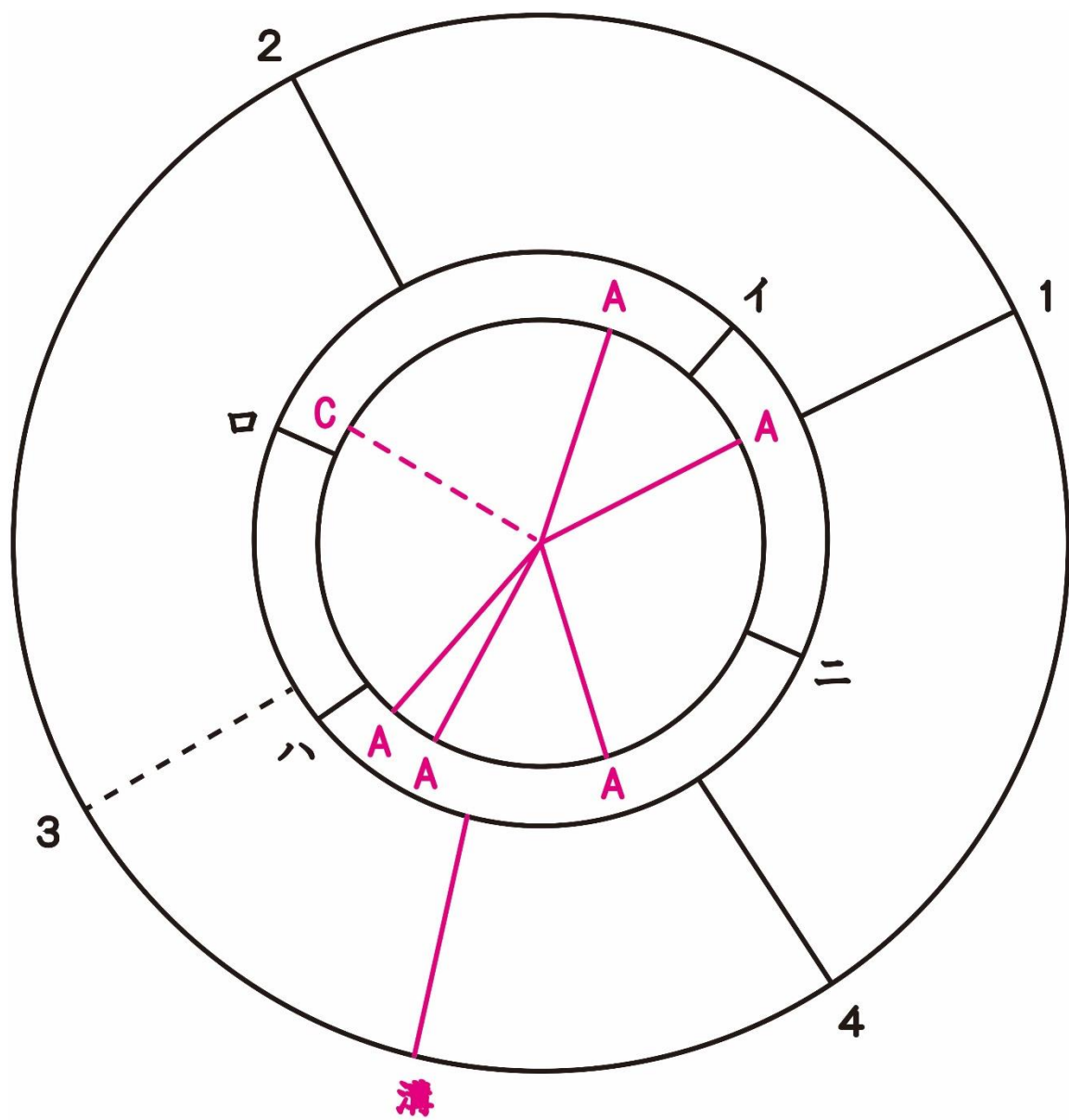
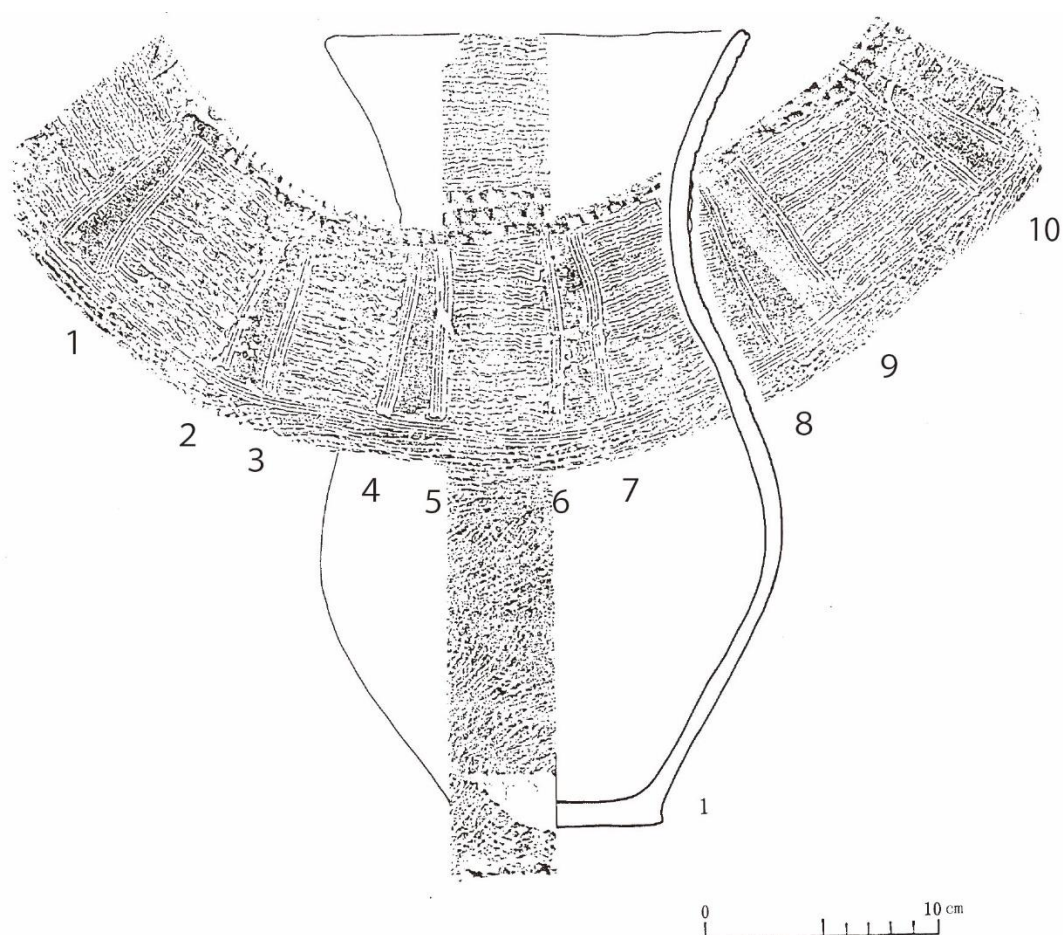


図 2



網掛けは文様がない部分

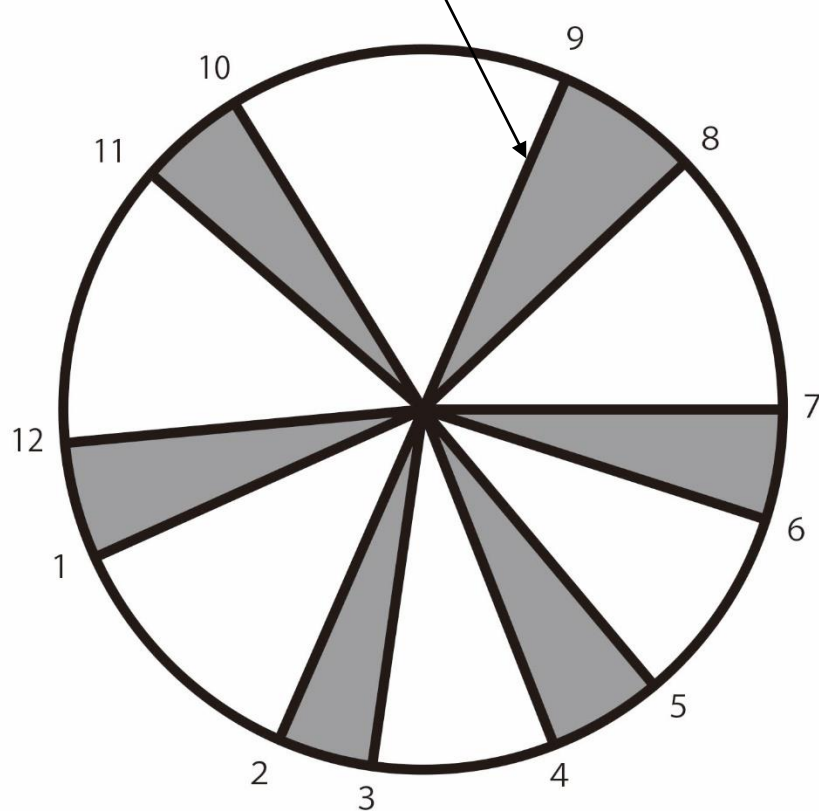


図 3

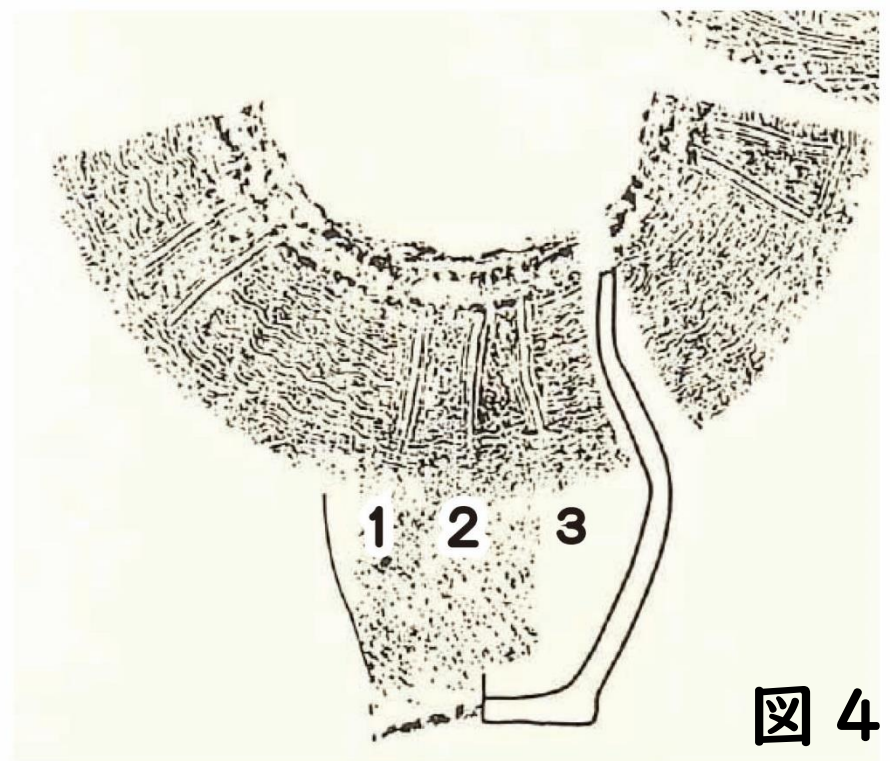
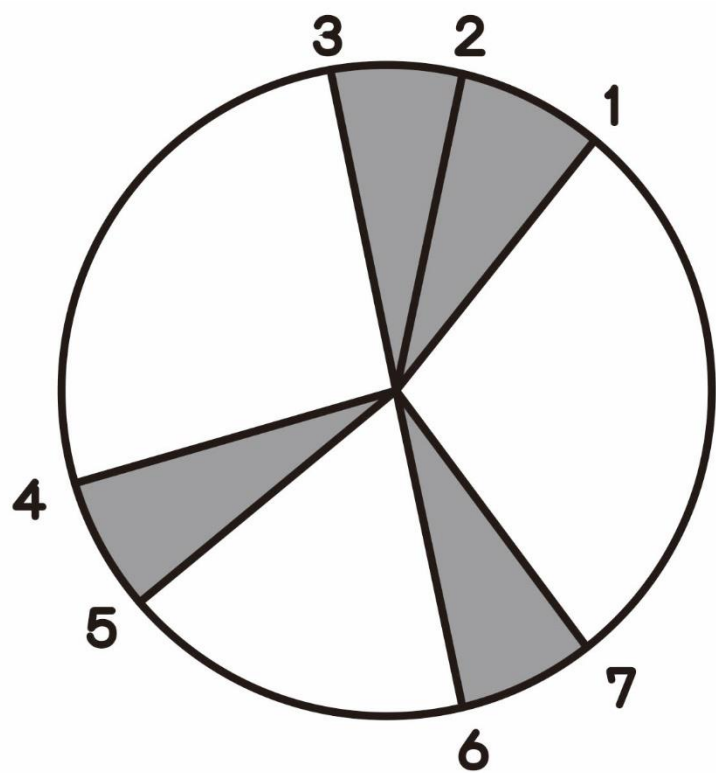


図 4

してみました(図3・4)。角度を調べてみると、図2のように均等な割付が意識されていないことが確認できました。縄文土器と弥生土器など、幅広い時間軸での認知構造の変化の有無なども調査していく必要があります。

時期だけでなく、器種の検討も可能です。展示しているミニチュア土器も、深鉢の土器と同じように把手が存在します。割付を調べてみると、正確な割付というよりは、4つの単位を意識しているように思えます。ミニチュア土器は、祭祀などの儀式に使われたもの、子どもの玩具として使用されたなど多くの説が唱えられていますが、はっきりとしたことは分かっていません。

製作者の意識を窺うことで、何らかの用途の推測につながるかもしれません。

Ⅱ 胴部を考察しよう

ここでは胴部に残る痕跡から土器製作をみていきます。

胴部で紹介するのは「輪積み」と「文様の方向」です。

胴部には、土器の中でも多くの情報が詰まっています。

そこには、土器製作へのヒントも隠されていますので、確認してみましょう。

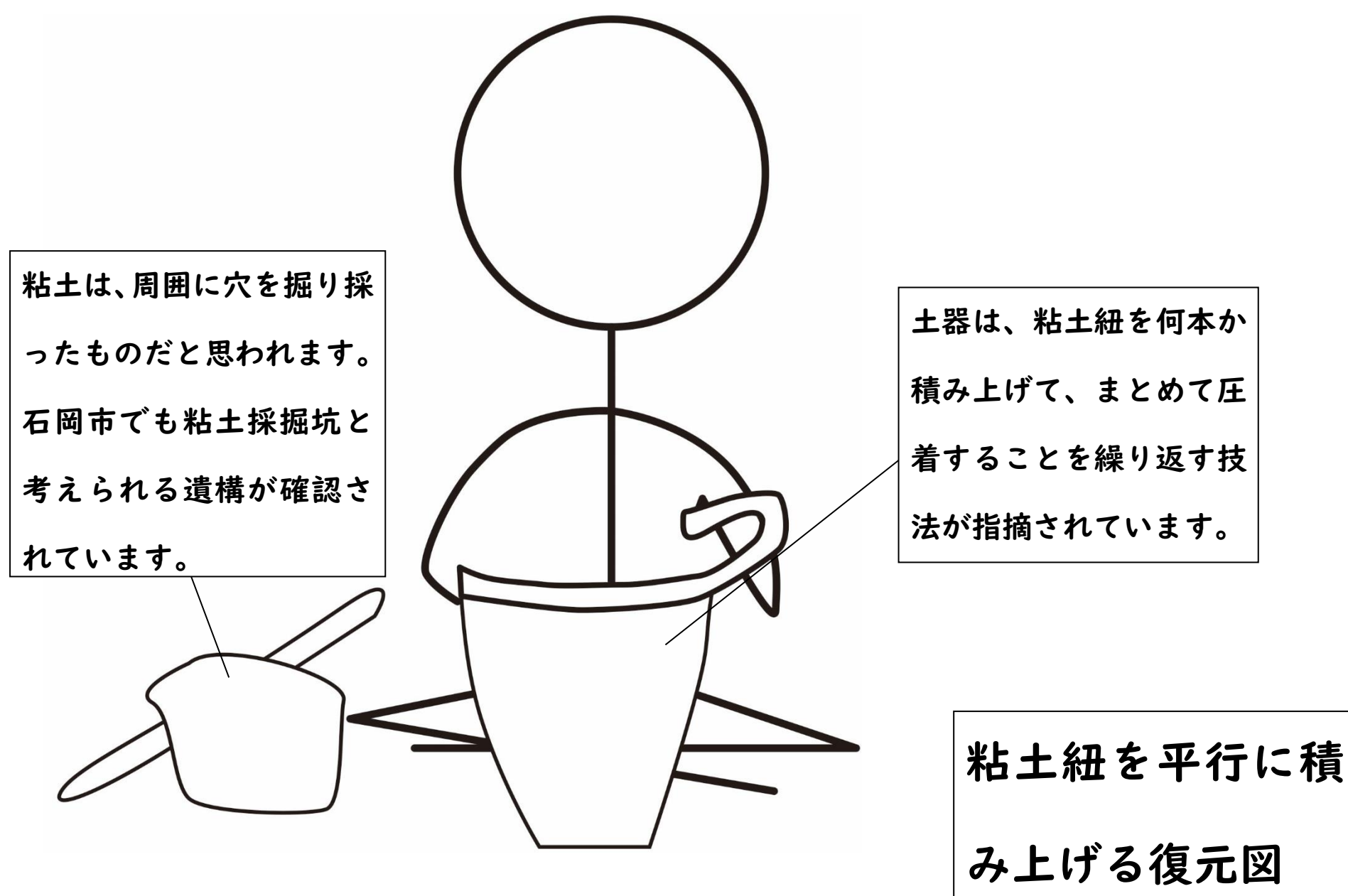
Ⅱ－Q1 「輪積み」とは？どんな痕跡？

「輪積み」は、粘土紐を地面に対して平行に積み上げることで土器を作る方法です。

細かく観察すると一部の土器には粘土紐の継ぎ目の痕跡が地面に平行に積みあがっている様子が確認できます。縄文人が土器を製作する際に、土器の表面を平滑に仕上げることができなかった(もしくはしなかった)個体と考えられます。

こうした粘土紐の痕跡から、土器がどのように製作されているかを考えることができます。現代の陶芸では、粘土紐をらせん状に巻きあげる「紐作り」と呼ばれる技法が存

在し、古い考古学の文献でも「螺線状」の語句が度々登場し、製作方法の一つと考えられていました。

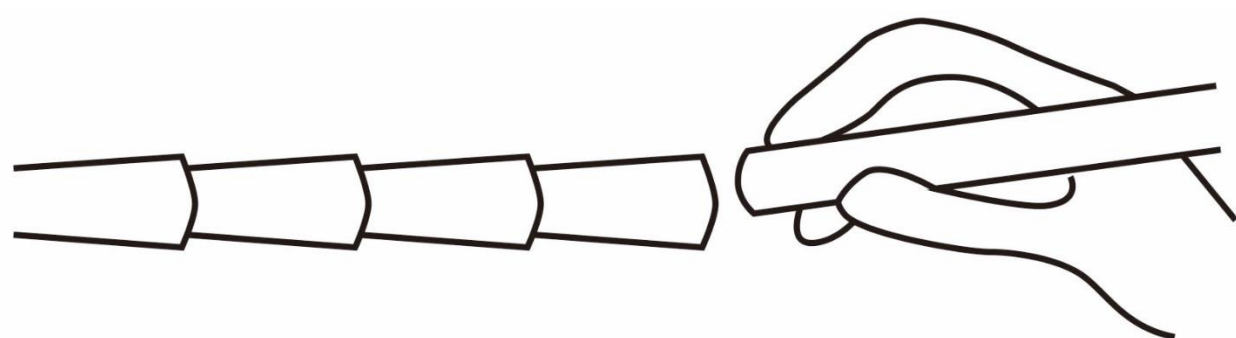


ただ、今回展示した平行に積みあがっている跡から、「輪積み」の方が実態に近いことが確認できるのです。

ただ、すべての土器が輪積みで作られているわけではありません。粘土を指でつまみあげる「手づくね」や、カゴなどの型に粘土を貼り付けて成形する「型起こし」と呼ばれる技法でも土器が作られていることが確認されています。

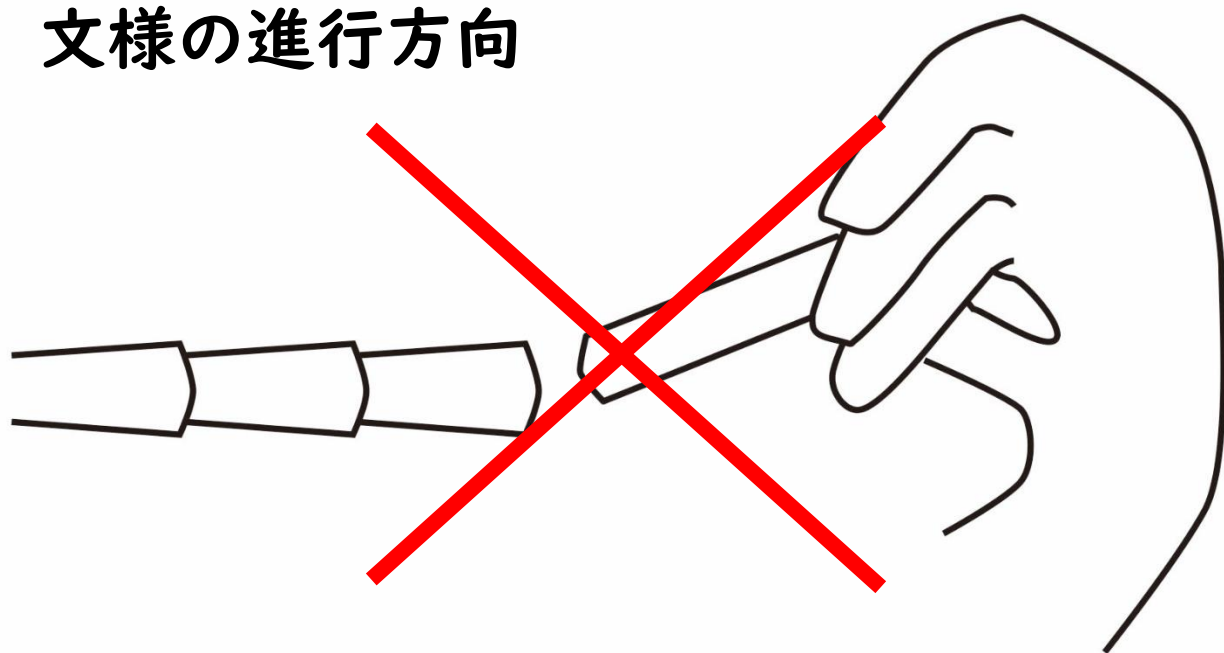
Ⅱ-Q2 文様にも方向があるの？

土器には様々な文様がありますが、その細かな違いからその方向を推測できます。下の図のように、土器に施文をする際、その向きを確認することで、利き手も推測できるのです。石岡市で確認できる土器施文の多くは、右手での施文が推測できるものが多いです。現代と同じで右利きの人が多かったのでしょうか。左手での施文が推測できる土器と見比べてみてください。

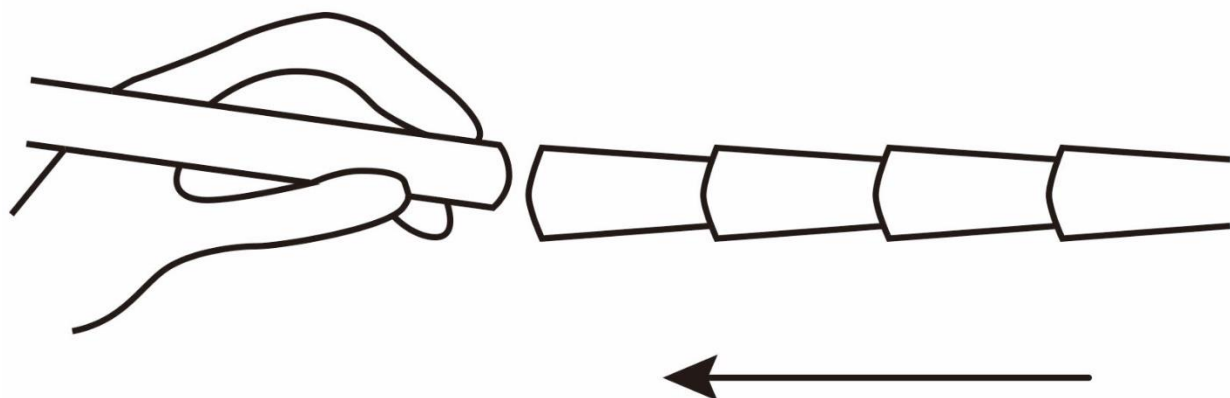


右手で文様を付けた場合

文様の進行方向



右手と同じ模様を左手でつけようと頑張った場合。手首が曲がってしまいます



左手で文様を付けた場合

Ⅲ 底部を考察しよう

ここでは、底部に残る痕跡を確認してきましょう。

底部で紹介するのは、ずばり「溝」です。

土器底部の外周部と胴部への立ち上がり部分には、一見すると傷のように付けられた垂直な溝が確認できます。

この溝は、縄文時代の研究の中で発見され、長らく当時の人々の意図的な施文であると考えられてきました。そして、数が少ないことから、特殊な容器であるという説、使用時に火にかけるなどの目的で吊り下げるためにあらかじめ溝を付けたとする説、文様を付ける際の目安としてつけたとする説など多くの言及がされてきました。

しかし、石岡市にある多くの土器底部を確認すると、およそ 10%の土器に「溝」がつけられていましたし、その一部は人々が意図的につけたとはいづらい溝もありました。

そこで、今回は、そうした細かい溝から、当時の人々の生活をみていくことにします。

Q1 溝は1つの底部に何「個」についている？

石岡市を代表する縄文中期の遺跡である東大橋原遺跡の底部を調べてみると、およそ 80%が 4「箇所」に溝を持つことが分かりました。

ここで、「個」ではなく「箇所」を使用したのにも訳があり、隣り合うように1「箇所」に複数「個」の溝が確認できるものもありました。

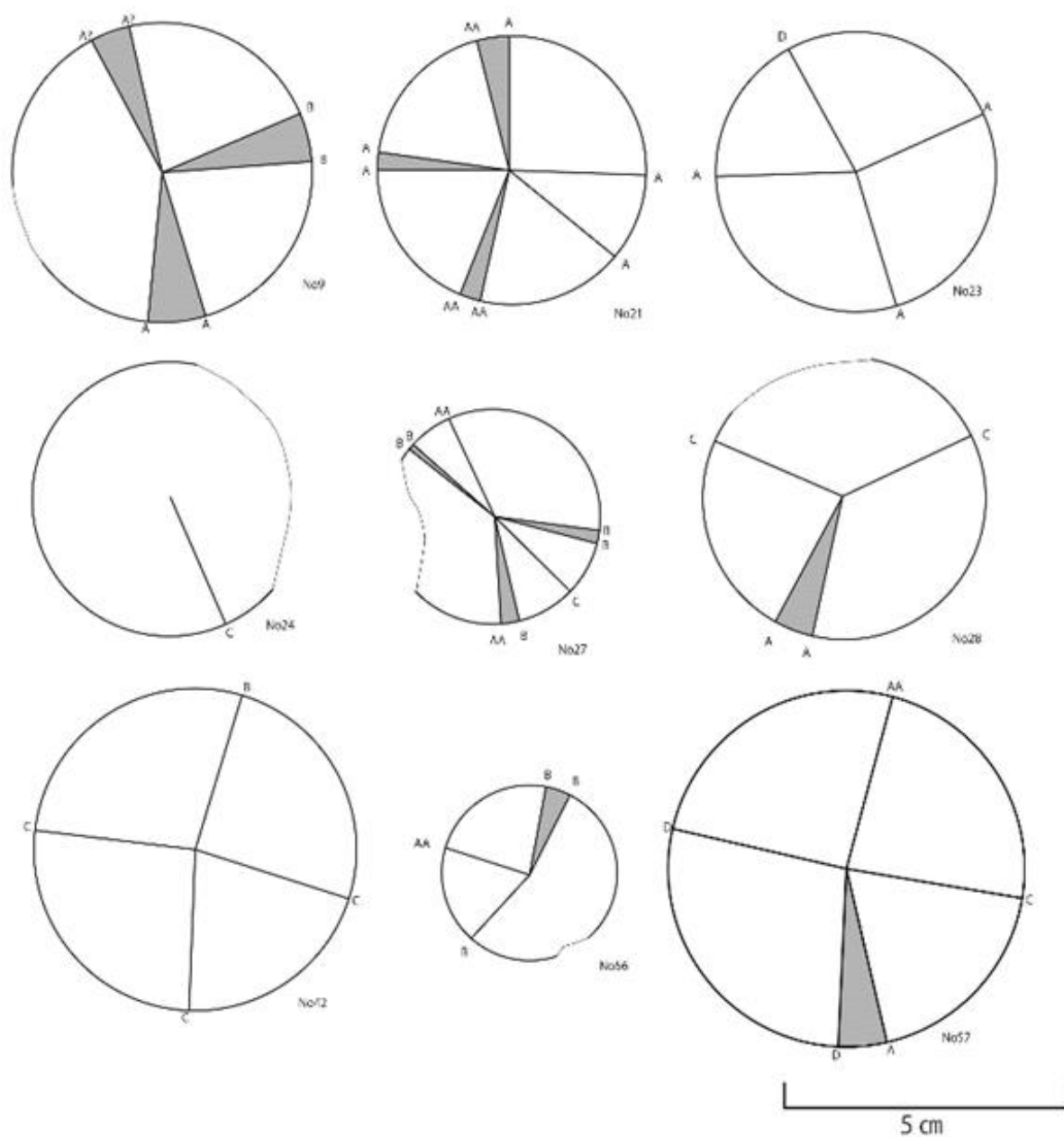


1「箇所」に2「個」
溝がある例

溝は、「個」よりも「箇所」数に意味があると考えていますので、ここでは4「箇所」として回答します。

発展！ 底部の文様割付

I口縁部でも出てきましたが、文様割付の手法は底部にも応用可能です（**I口縁部-図1・2の赤線など**）。溝の配置を文様割付の手法から調べてみると、文様など意図的に配置する個体よりもバラバラな個体が多いことが分かりました。また、4「箇所」の配置から、なにか目的があって付いたものであることも推察できました。



底部で確認された溝の
文様割付の例。正確な
割付はあまりありませ
ん。

Q2 溝は全部同じもの？

溝を調べていくと、多くの種類があることが分かりまし
た。そこで、溝の大きさや形から分類をしてみました。

A：溝が丸みを帯び平滑、丸みを帯びているもの

B：溝が細く鋭いもの。

C：溝に素材の痕があり平滑でないもの。すれ等が想定で
きるもの。

D：底面の粘土がつぶれたような溝。

そのほか、小さなくぼみや細かな粘土変化なども確認で

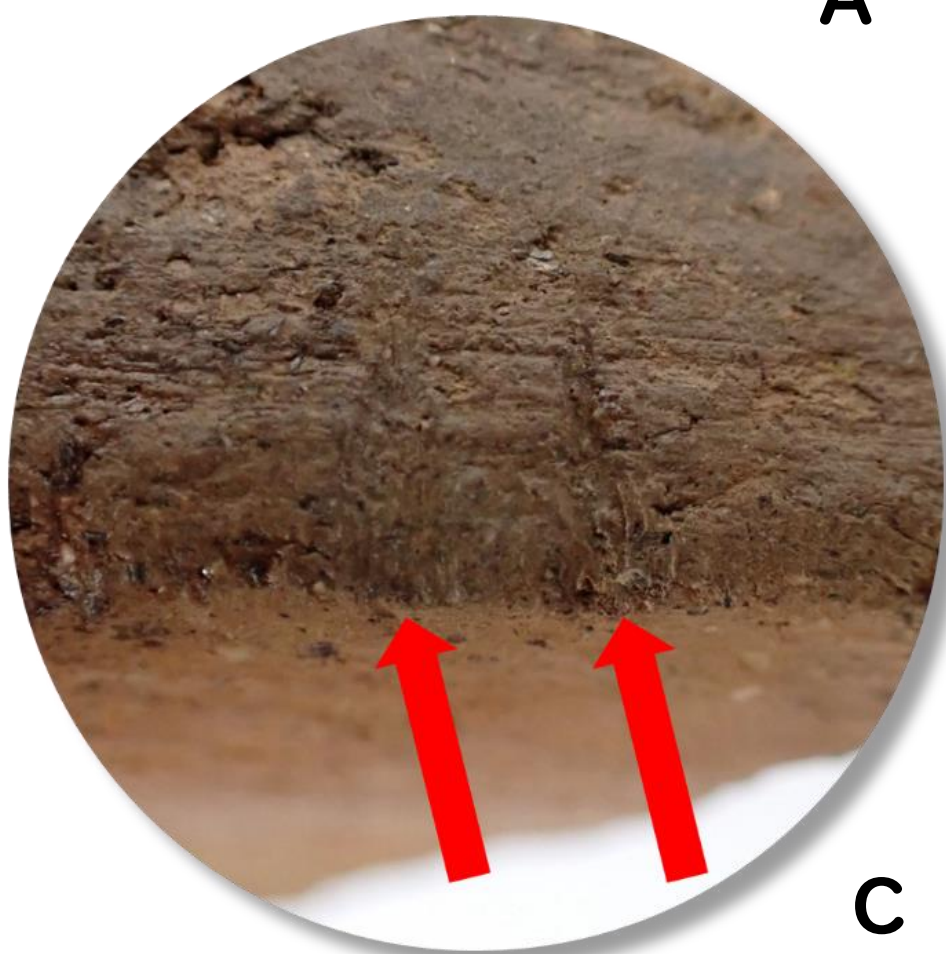
きました。



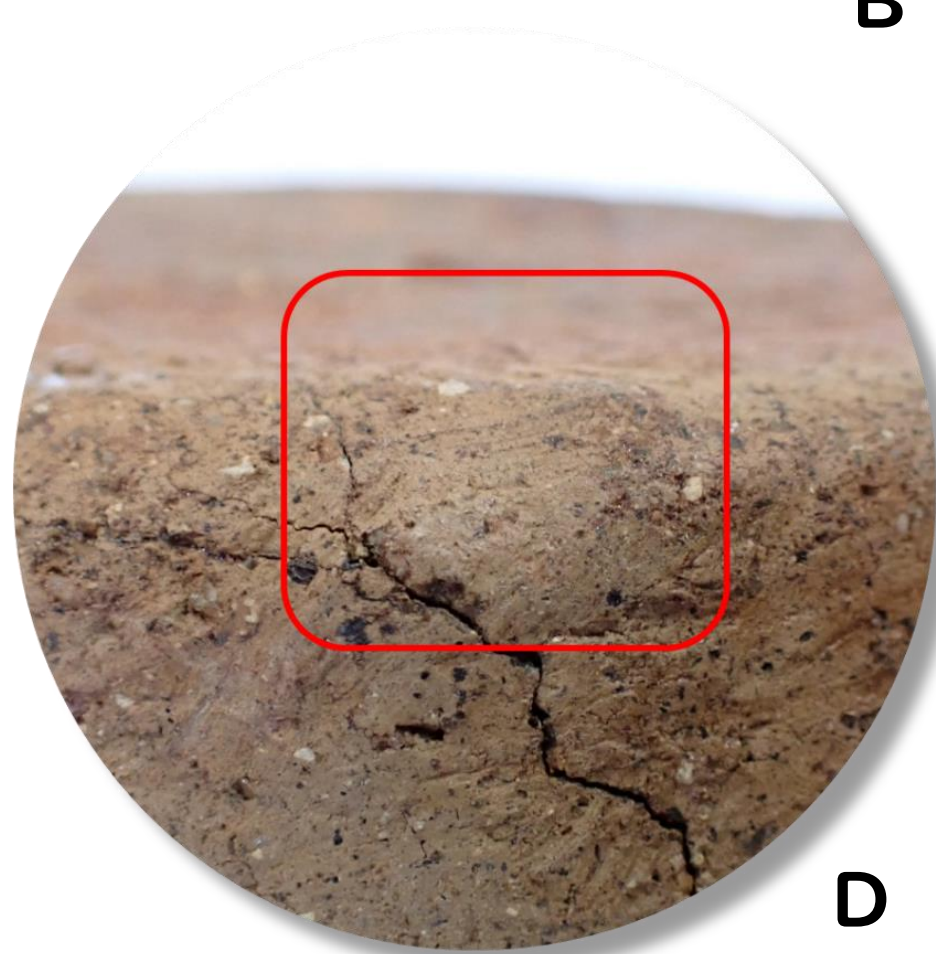
A



B



C



D

また、土器底部ごとに溝を調べてみると、AとA、BとB…というようにセット関係で一つの底部に存在する確率が高いこともわかりました。深い溝(例えば溝 A)を持つ個

体は深い溝が四方につき、浅い溝（例えば溝 C）を持つ個体は浅い溝が四方につくといった形です。このセット関係も溝を考えるヒントになりそうです。

Q3 溝の時代や分布は？

溝は縄文時代の研究の中で発見されましたが、詳しく調べていくと、その時代幅は大きく広がる可能性が高くなってきました。縄文前期から既に溝が確認でき、中期・後期とたどることができました。また、石岡市餓鬼塚遺跡出土

縄文前期 中期 縄文後期 古墳



時代をまたいで確認できた底部の溝

の古墳時代の甕などからも溝が確認できました。溝はそれ以降確認できていませんが、そのころ出現・発展してくるロクロ技術やそれに伴うカマド等の生産体制が溝の終焉と

関係するのかもしれませんが。

また、分布については 1995 年の段階で福島県から鳥取県までの広い範囲に広がることが分かっています(荒木ほか)。地域的な様相ではなく、日本全般に広がるものと考えてよさそうです。

Q4 溝は何のためにしている？

溝の目的とは何でしょうか。

これまで見てきた特徴から、約 10% の土器に見られること、意図的でない溝も存在することが確認できました。また、割付が正確ではないが 4 箇所以上の溝がついている個体が多いことや同じ種類の溝同士が同一個体にみられることなども分かりました。さらに、口縁部でも溝が確認できており(I 口縁部-図 2 の赤線)、底部の溝とも近い関係にあります。以上から溝は紐をかけた痕跡であることが推察できます。

また、さらに丁寧にみていくと文様を付け、底面を調整した後に溝がついていることが分かりました。このことから、土器の乾燥のためにつるした痕跡ではないかと考えら

れ、溝同士が同じ種類で確認できるのも乾燥の度合いと推測できます。

土器をつるした実験も行いましたが、これまで確認してきた溝と同様の溝が確認できました。このことから、「施文・施紋⇒底面調整⇒紐つるし乾燥」の工程が考えられました。



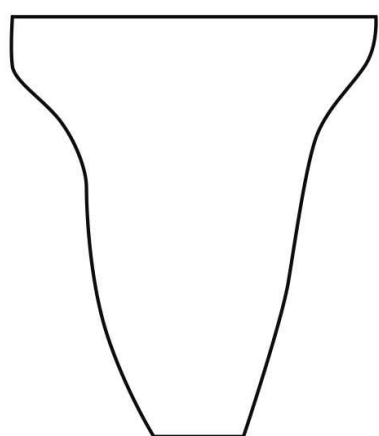
実験の様子。細い紐でも持ち上げることができました

実験で確認できた底部溝の一例。実際の土器の溝と類似しています！

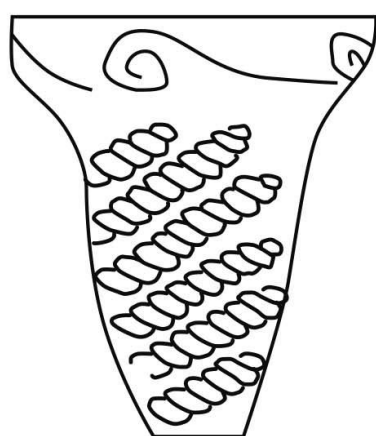


溝の呼び方ですが、紐などをつるし、当時の人々の意図が介在せずについた痕跡であることが高いため、こうした溝を「すれ溝」と呼称することを考えています。

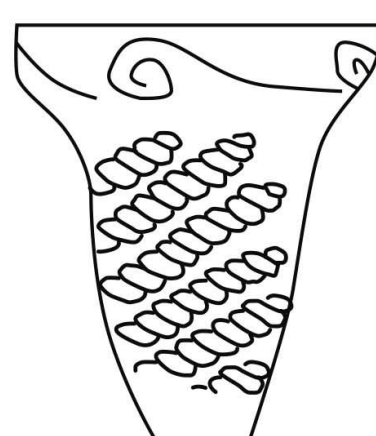
皆さんはどう思いますか？



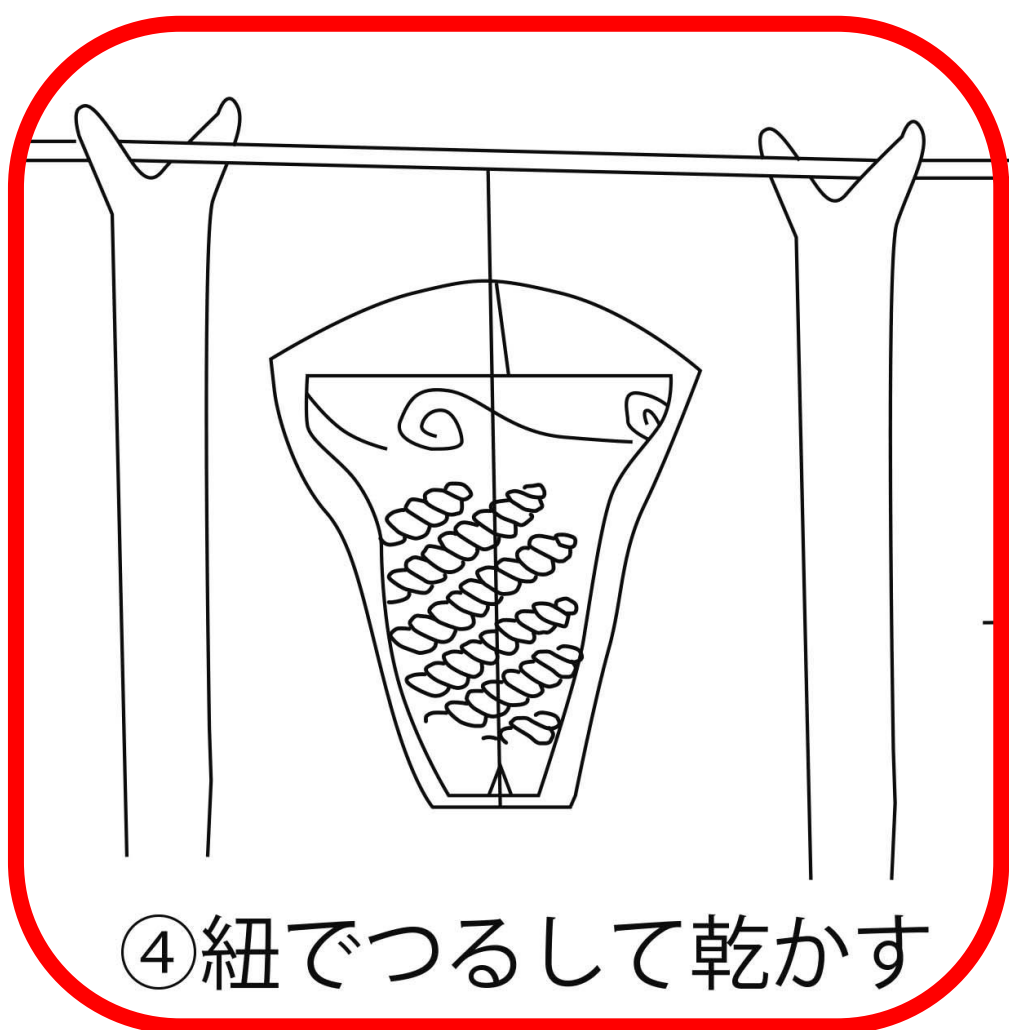
①器形製作



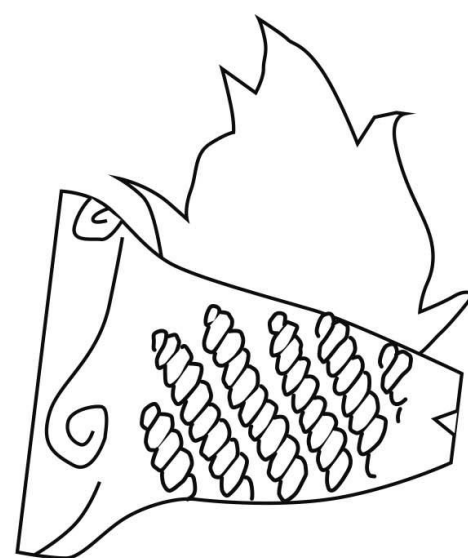
②施文・施紋



③底面の磨き



④紐でつるして乾かす



⑤焼成

IV 土器製作のまとめ

ここまで、土器の部位ごとに、**細**部に着目し、当時の人々の生活に迫ってきました。

ここでは当時の土器製作をまとめてみましょう。土器製作は「形づくり⇒文様の施文・施紋⇒底面の調整⇒乾燥(土器をつるす等)⇒焼成」とたどると考えられます。

形づくりは胴部で見たように多くが輪積みの技法で行っているものと考えられます。文様の施文・施紋は、決まった割付がある場合とない場合が確認できました。製作者は数を推測し考える能力があったのでしょうか。弥生時代に入っても文様の割付の自由度はあまり変わらないことも確認できました。また、当時の人々にも左利きの人がいる可能性が考えられるなど多様性もみられました。

乾燥段階は、底部の「すれ溝」から紐で土器をつるした可能性を考えることができました。

今後はさらに**細**かい分析もおこなって、より**詳細**に土器づくりの環境に迫ることにします。

おわりに

今回の展示は、土器の**細部**に着目し、その痕跡から土器製作や当時の暮らしを復元してきました。

土器の新しい見方を発見していただき、過去の人々に思いを馳せていただくことができていれば幸いです。

石岡市には、まだまだ多くの遺跡・遺物があり、まだ整理しきれない遺物も数多く存在します。今後、さらに調査・整理を進めていく予定ですので、続報をお待ちください。

<展示に使用した主な参考文献>

- ・八幡一郎 1928「最近発見された貝輪入蓋附土器 下總古作貝塚遺物雑感の一」『人類学雑誌』43-8
- ・大沢鷹邇・芝崎孝 1962「東京都・中村橋遺跡の中期縄文土器」『考古学手帖』14 塚田光
- ・塚田光 1964「群馬県・新巻遺跡の中期縄文土器」『下総考古学』1 下総考古学研究会
- ・山内清男 1964「縄文式土器・総論」『日本原始美術』1 講談社
- ・斎藤忠 1971『坪井正五郎集』築地書店
- ・芝崎孝 1972「底部にえぐり込み溝を有する土器とその類例」『考古学雑誌』58-1 日本考古学会
- ・森淳・風間秀夫 1976『陶芸教室』創元社クラフトシリーズ
- ・大村裕 1984「所謂『角押文』と『キャピラー文』の違いについて」『下総考古学』7 下総考古学研究会
- ・丑野毅・田川裕実 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24 日本文化財科学会
- ・荒木ヨシ 1995「縄文時代における分業の一考察」『物質文化』58
- ・新井聡 1996「中台遺跡出土の、底部にえぐり溝を有する縄文土器について」『研究ノート』5 財団法人茨城県教育財団
- ・小林謙一 1999「縄紋中期土器器面の文様割付について」『セツルメント研究』1 セツルメント研究会
- ・小林謙一 2000「縄紋中期土器の文様割付の研究」『日本考古学』10 日本考古学協会
- ・可児通宏 2005『縄文土器の技法』同成社

- ・大村裕 2008『日本先史考古学史の基礎研究』六一書房
- ・小川和博 2009「石岡市白久台遺跡の土器」『常総台地』16 常総台地研究会
- ・金子守恵 2011『土器づくりの民族誌 エチオピア女性職人の地縁技術』昭和堂
- ・上高津貝塚土器づくりの会 2014『縄文土器の作り方』上高津貝塚土器づくりの会
- ・櫛原功一 2016「土器作りの場を考える」『土器を掘る―土器研究と圧痕法のいま、そして未来―』熊本大学小畑研究室・明治大学黒曜石研究センター・日本先史文化研究所
- ・櫛原功一 2019「土器作りの場を考える―縄文集落からみた土器作り―」『土器作りから土器圧痕を考える』熊本大学小畑研究室
- ・西本志保子 2019「南西関東における縄紋中期連弧文土器―文様割付からの検討―」『日本考古学』49 日本考古学協会
- ・小林謙一・小林尚子・中山真治 2020「府中市内出土縄紋中期土器の文様割付」『武蔵府中を考える』2 府中市史編纂委員会・府中市
- ・金子悠人 2023「縄紋中期土器底部の溝の分析と土器の乾燥 東大橋原遺跡を中心に」『石岡市文化財調査報告会発表要旨』7 石岡市教育委員会

展示品一覧

No.	展示品	遺跡	時代	所蔵
1	阿玉台式土器	白久台	縄文中期	石岡市教育委員会
2	加曽利 E 式土器	東大橋原	縄文中期	石岡市教育委員会
3	十王台式土器	外山	弥生後期	石岡市教育委員会
4	十王台式土器	外山	弥生後期	石岡市教育委員会
5	ミニチュア土器	白久台	縄文中期	石岡市教育委員会
6	加曽利 E 式土器	白久台	縄文中期	石岡市教育委員会
7	阿玉台式土器	東大橋原	縄文中期	石岡市教育委員会
8	手づくね土器	宮平	古墳	石岡市教育委員会
9	土器片	白久台	縄文	石岡市教育委員会
10	粗製土器	北垂貝塚	縄文後期	石岡市教育委員会
11	土師器甕	餓鬼塚	古墳後期	石岡市教育委員会
12	底部土器片	東大橋原他	縄文	石岡市教育委員会
13	製作土器	-	-	石岡市教育委員会

[illegible]

[illegible]

石岡市立ふるさと歴史館 第35回企画展

美は細部に宿る

令和6年1月10日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195

茨城県石岡市柿岡 5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016

茨城県石岡市総社 1-2-10

TEL 0299-23-2398